



名探偵ポアーン、 最後の答

9月29日
Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

9月29日のおはなし「名探偵ポアーン、最後の答」

「答は殺人事件後に！」

女子アナウンサーの弾んだ声の後、画面は暗くなりしばし無音があって『名探偵ポアーンうまごやし殺人事件』が始まる。君はその最初のカットを見てもう目をそらしたくなる。煙草が切れたのに気づき、灰皿のしけもくを物色して火をつける。いがらっぽい煙に喉がからえずきする。缶ビールを手に取ると、空いた缶がいくつか床に落ちて安っぽい音を響かせる。

2000年に深夜の連続ドラマとしてオンエアした当初、ポアーンのシリーズは地味でマイナーなキャスティングとわかりづらい設定のため、あまり視聴率を稼げなかったが、たまたま見てくれたごく一部の視聴者から圧倒的な支持を得て、半信半疑でつくったスペシャル版がいろいろな条件も重なって高視聴率をマーク。これがまたオンエア後に支持する声が続々と届き、急遽新シーズンのオンエアが決まった。

いま考えれば、インターネットの普及とタイミングが一致していたことも追い風となった。一部のマニアがつくったファンサイトのできがよく、各種メディアで「おもしろサイト」として紹介されたことも人気に拍車をかけた。テレビ局のプロモーションでは手が届かないターゲットに届いたのだ。第2シリーズは深夜ながら毎回10%代という驚異的な視聴率を叩き出し、局もいよいよ本腰を入れた。が、これが不幸の始まりだった。シリーズにとっても、君にとっても。

初期から関わってきたキャスト・スタッフがはずされ、「実力者」たちが取って代わった。シナリオが人気脚本家に入れ替わったのをはじめ、プロデューサー・監督にも他の人気ドラマシリーズを手がけてきた売れっ子を集め、最悪なことに主人公の名探偵ポアーンその人のキャスティングまでもが変更された。ゴールデンタイムにシフトした第3シリーズは派手な番組宣伝とタレントの人気に加え、「ポアーンは面白い」という噂が広まっていたためもあり、初回いきなり30%超の高視聴率でスタートした。

けれどそのシリーズが歴史的な大失敗に終わったことはみなさんご存じの通りだ。ポアーンの人物設定もキャラクターも変わってしまい、おまけに恋愛のかけひきめいた要素まで加わったことで世界観が完全に崩れてしまったのだ。番組公式サイト掲示板は非難と失望と悪口雑言で埋め尽くされ、最終回の翌日いっぱい突然閉鎖されてしまうという異常事態となった（ご記憶だろうか。当時の局の掲示板は書き込みが自由だったのだ）。

曰く「主演を豆本豆蔵にもどせ」。
曰く「脚本をケニー・ワンに書かせろ」。
曰く「おれたちのポアーンを返せ」。

にもかかわらず、最終回にいたっても20%を少し切るくらいの視聴率だったことに気をよくしたのか、それから毎年スペシャル版がつくられることになった。もちろんそれは愚行の上塗りに他ならなかった。毎年無惨な代物が積み重なっていった。「オリジナル版への冒涇が年中行事化された」というのが先述のファンサイト（ファンサイト？ いや。いまやアンチ・ファンサイトと化していた！）での評価だった。

去年からは「ポアーン・クイズ」なるものが始まった。8時58分からのミニ番組内でクイズが出題され、9時から本編がスタート、10時を少し回る頃に出されるドラマ上のヒントをもとに10時30分までに番組ホームページに答を書き込む。そして本編終了後、答がわかるというしかけだ。去年は3万件もの応募があったらしい。裏返せばそれだけドラマを片手間にしか見ていなかった人がいたと言うことだ。

「とにかくいまのはひどいことになってます。見ろとは言いませんが、まあぶっ飛ばす対象としてよかったら見てください。番組が終わったらまた電話しますから」と携帯電話に顔見知りのプ

ロデューサーから連絡が入ったのは番組の始まる直前だった。何でもいま局内でポアーン・オリジナルチームの面々が徐々に力をつけてきて、「深夜にオリジナル版のポアーンを復活させる」というプロジェクトを進行しているのだという。「ワンさんの好きなように書いてくれていいですから」そう彼らは言う。「また、お茶の間の前で安心しきっている視聴者を煙に巻いてやりましょうよ！」

なるほど目の前のポアーンはひどいことになっていた。カルト的人気を誇った第1シリーズと第2シリーズからの「引用」だらけのつぎはぎの展開。見ているうちに気持ちが悪くなってきて、テレビを消した。無理だ。いまさらポアーンを書いてくれと言われても悪い冗談にしか思えない。オリジナル版のスタッフである彼らとの関係がこじれたわけではないが、これは断るしかない。たとえ書いたって、ゴールデンタイム版への皮肉と呪詛が渦巻くものになってしまいそうだ。そんなもの、誰が見る？ 答は決まっているだろう。その瞬間、不意にさっきの場違いな女子アナの声が頭に響く。

「答は殺人事件後に！」

これを字義通りに取ればどういうことになる？ 殺人事件後という以上、事件は完結しているはずだ。答も何も正解は一つしかない。なのに、その後に答がやってくるというのだ。どういうことだ？ では完結した殺人事件とは何なのか。そして殺人事件後の答とは。間違った解決への修正ということか？ いやいや、それでは面白くない。それでは単に「実は解決していなかった」ということになる。では「正しく解決していた。にもかかわらず答はその後にやってくる」ということか。何だろう？ 殺人事件の解決のその先に見つかるもの。それはいったい……。そう。新シリーズのテーマが見つかったのだ。君は携帯電話を手にとると着信履歴からコールバックする。

(「殺人事件後」 ordered by おーね-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験

済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上げてまいりましょう。

名探偵ポアーン、最後の答

<http://p.booklog.jp/book/34705>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34705>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34705>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.